

新潮45
1

新春特別対談

養老孟司 VS. 内田樹

新潮45

333号記念特大号

2010
1

日本の行く末

佐伯啓思

漂流、鳩山内閣

野中広務

裏金太り「小沢一郎」が逮捕される日

岡本純一

新春特別対談

養老孟司 VS. 内田樹

“刀塔”的民が造る異次元

「坂の上の雲」と清水次郎長

高田明和

浜松医科大学名誉教授

NHKで3年間放映予定の「坂の上の雲」。登場人物たちが心酔していた意外な人物、それは伝説の侠客であった。

NHKで平成21年末から3年間放映予定の『坂の上の雲』は司馬遼太郎氏の同名の小説をドラマ化したものである。『坂の上の雲』は松山で生まれ、日本の勃興期に青春を過ごした正岡子規、その友人である秋山真之と兄の好古を中心、明治という時代を生き抜いた若者を描いた青春ドラマと言えるだろう。

じつは『坂の上の雲』に登場する人々は私の祖先、清水次郎長と深い関係があるのだ。司馬作品では描かれなかったが駿河湾であり、軍艦の乗員が訓練の合間に上陸して、休養をとったのももう一つの人間ドラマを紹介したい。

次郎長については侠客の面が強調されているが晩年の明治19年に清水の向島に「末広」という旅館を開業した（写真）。さて明治3年日本政府は海軍力の増強のために、士官を養成する海軍兵学校を築地に作り、これは9年に海軍兵学校に名前を変えた。この兵学校では生徒のために、軍艦を日本周辺に回遊させ、砲撃などさまざまな軍事訓練をした。そのような場所の一つに選ばれたのが駿河湾であり、軍艦の乗員が訓練の合間に上陸して、休養をとったのが清水港であった。

当時、次郎長の名前は次第に有名になりつつあった。それは養子の天田五郎が出版した『東海遊侠伝』がベストセラーになり、3代目神田伯山がこれを講談としてわかりやすく伝え、2代目広沢虎造がこれを浪曲としてはやらせたからである。次郎長が『坂の上の雲』の登場人物である廣瀬武夫、小笠原長生、秋山真之などとつきあうようになったのは、この末広ができるからだった。一方、正岡子規などとの関係は次郎長の養子・天田五郎により結ばれた。

以前、「新潮45」の2008年8月

号に「知られざる清水次郎長の素顔」という文章でも書いたが、お読みになつていなかつた読者のために、私と次郎長との関係を簡単にくり返す。

清水次郎長こと山本長五郎には子どもがいなかつた。そこで彼は兄の佐十郎の次女、まつを養子にした。彼女は慶応3年に元武士で豊屋をしていた高田元吉に嫁ぐ。元吉とまつの間に生ま



次郎長と海軍軍人が出会う舞台となつた旅館「米広」(写真中央の2階建て)

れた男の子が虎次郎で、私の祖父である。その妻のいそは昭和35年まで生きた。それは私が25歳の時であつた。いそは次郎長の事蹟を当時医学部に在籍中の私に伝え、後世に残してもらうことを生き申斐していた。それは戦後、暴力否定などの流れの中で次郎長が忘れられていったからである。

そこまで次郎長を有名にし、「坂の上の雲」の登場人物などと関係をもたせた明治の歌人・天田五郎（後の天田愚庵）について話を始めよう。

「東海遊侠伝」が出来るまで

天田五郎は嘉永7年に磐城平藩（現福島県いわき市）今新田村に生まれた。磐城平藩は戊辰戦争の際に奥羽越列藩同盟の最前線として薩長軍と戦つたが、敗れ、平城は落城した。五郎は数え15歳にしてこの戦争に出陣したが、仙台に逃れた。戦後故郷に戻つてみると自宅に父母も妹もいない、かといって血の跡もない。どこかに逃れているだろ

うということで探したが見つからない。以後、五郎は父母や妹を探し出すために、日本全国を旅していくのである。

明治4年に上京、5年には政府の官吏だった小池祥敬と知り合い、彼の家に住む間に山岡鉄舟や国学者の落合直亮と知り合いになった。落合は、彼の志がかなうように努力した。それと共に彼に国学の基礎を教えた。五郎はその後薩摩に渡り、西郷従道の軍に入り、台湾にも出兵している。

明治11年、山岡鉄舟は五郎がありに向こう見ずで、自分の肉親を捜すためには戦火も厭わざ飛び込んでゆくという性質に心を痛め、五郎を次郎長に預けることにした。次郎長は世間的にも顔が広く、肉親捜索の手助けになる可能性があり、さらにその勢力範囲からは容易に抜け出せないために、五郎を保護するのに次郎長ほどの適任者はいないと考えたのである。

五郎は次郎長一家と生活をともにするうちに、彼らの生き方が彼の想像を

絶するものであったことや、その劇的な波瀾万丈のやりとりに驚くとともに感銘を受け、次郎長を主人公にした

『水滸伝』の日本版を書こうとした。

これが『一名次郎長物語』である。

この原稿は鉄舟にあずけたが、次々と借り手が現れ、明治13年の次郎長への手紙に「なくされないやうに誠に骨

を折りたりとて嘯し有之候。余りかり

てがおほいゆえかへつて出版などの都

合のために困ります」と書いてい

るくらい評判になつた。明治14年には

五郎は次郎長の養子になつた。先の原

稿が『東海遊侠伝』として出版された

のは明治17年のことであつた。

五郎から影響を受けた正岡子規

五郎の歌に影響を与えたのは丸山作樂と落合直文である。丸山のことはあまり知られていないが、彼は芝三田に生まれ、明治2年に外務大丞になり、樺太に出張し、対露交渉をした。その後征韓論では政府に受け入れられず、

終身禁固となつたが、明治13年に恩赦で出獄した。彼は台湾出征のころに五郎と知り合い、お互いに影響を受けた。

丸山は万葉調の歌を詠み、五郎も彼のことを深く尊敬している。

さらに落合直文も五郎に影響を与えた。彼の歌集『萩之家歌集』には「僧愚庵に与へて」と題した歌がある。

生死のさかひはなれし君なれど

なほ千代ませと祈らるるかな

愚庵とは五郎のことである。五郎は

鉄舟の「これほど探しても父母、妹が

見つからないのでは、彼らは生きてい

ないかも知れない。これからは仏道に入り、彼らの供養をせよ」との言葉で、

明治20年、京都林丘寺において滴水禪師より剃度を受け、鉄眼、またの号を

愚庵と称した。

愚庵の和歌は正岡子規、与謝野寛（鉄幹）に影響を与えているが、ここでは与謝野寛については触れず、正岡子規についてのみ見てみることにする。

子規が今までの和歌を批判し、新聞

「日本」に「歌よみに与ふる書」を発表したことは有名である。その中で「近來和歌は一向に振ひ不申候……貫之は下手な歌よみにて『古今集』はくだらぬ集に有之候」と大胆に当時の和歌や有名な歌人を批判した。それには愚庵の万葉調の和歌が大きな影響を与えていることは間違いない。

子規の初期の歌として有名な「愚庵禪師御もと」には、以下のよき歌がある。愚庵が子規の好物の柿を送つたことについて――。

みほとけにそなへし柿の
あまりうらん
我にぞたびし十まりいつ
あまりうらまき

文書くことぞわすれつる
心あるごとな思ひ我聞

「我師」という言葉は重要である。あなたのことについていつも思っていますよ、というのだ。

さらに明治30年に、桂湖鶴が京都よ

り愚庵のお見舞いの柿をもつてきましたお

礼に、

御仏に供へあまりの柿十五

柿熟す愚庵に猿も弟子もなし

という句と、「釣り鐘」という柿の名もおかしく聞き捨てがたくして、つりがねのへたのところが渋かりき」と書かれている。「柿熟す——」の句は愚庵没後100年記念として清水の日本平に建てられた句碑に刻まれている。

正岡子規は直接、次郎長と会ったわけではない。しかし、次郎長の養子となつた五郎との深い縁を考えると、彼もまた次郎長につながる人だと言えるのではなかろうか。

2・2・6 事件と「清水次郎長」

4 次は『坂の上の雲』に出てくる海軍士官、廣瀬武夫、小笠原長生、秋山真之、八代六郎などと次郎長の関係である。この関係が世間に知れたのは小笠原長生が昭和11年12月に発表した『大豪 清水次郎長』による。それまでは

浪曲、講談で知られていたとはいえたが、侠客の物語であつた。また、次郎長が死んでから約40年たつており、次郎長は過去の人であつた。

ところが、海軍中将にして子爵、東郷平八郎元帥の秘書であつた小笠原が次郎長の伝記を書き、自分を含め海軍士官がいかに次郎長を尊敬し、影響を受けたかということを本にしたのであるから、その反響は推して知ることができる。

では、小笠原長生とはどのような人物であったのであらうか。

小笠原は慶應3年に、唐津藩世嗣で旧幕府老中・小笠原長行を父として生まれた。海軍中将、子爵で正二位、勲一等を受けられた押しも押されぬ名門の一人である。彼は明治20年に海軍兵学校を卒業した。秋山真之の3年先輩であるが、非常に仲がよかつた。

明治22年に海軍少尉に任官、その後廣瀬武夫の強い勧めで次郎長に会つた。これが自分の人生を決定づけたと

彼も述べている。日清戦争では「高千穂」に乗って、黄海海戦に参加。日露戦争の時には軍令部の参謀であつた。

さて、小笠原が『大豪 清水次郎長』を出した昭和11年12月は彼にとっても日本にとつても重大な時であつた。

まず昭和10年8月に、2・2・6事件の引き金にもなつた水田鉄山新殺事件が起きる。当時、日本陸軍は皇道派と統制派が対立していた。皇道派の青年

将校・相沢三郎中佐が、白昼陸軍省に乗り込み、統制派の永田鉄山陸軍省軍務局長を斬殺したのだ。

皇道派やそれに賛意をもつ人たちは相沢を弁護した。当時、宮中顧問官であり、もともと東郷元帥の秘書をしていた小笠原は海軍の艦隊派に属して、相沢の弁護にまわった。艦隊派は皇道派と共に、軍縮に同意した海軍の条約派に対抗していた。

翌昭和11年に皇道派が2・2・6事件を起こすが、小笠原は皇道派に便宜を図るために活動していた。憲兵隊の調

書には「(小笠原は) 反乱事件の発生と共に同事件の被告北一輝、西田税、薩摩雄次等の依頼に依り事態收拾の為反乱者の企図する軍政府樹立に関して奔走し、反乱者の目的遂行を容易ならしめたるの疑いあるをもって、反乱帮助の罪に該当するものと認め……」と書かれ、小笠原も取調べられている。

一方、2・26事件の関連裁判のうち、蹶起将校の裁判は非公開で行われ、同年7月5日に判決、12日には13名の将校と2人の民間人が処刑された。残された一部の将校たちの裁判は翌年まで続けられることになる。こうした裁判が進行中に『大豪 清水次郎長』は出版されたのである。

結局、小笠原は罪に問われなかつた。しかしながら、おそらく小笠原は2・

26の蹶起将校、皇道派の軍人が義において、やむにやまれず立ち上がつたのであり、それは昔の侠客が悪をくじくために、時に自らの手を汚すことも辭さないという姿勢に似通つたものと

人々に伝えたかったに違ないのである。

小笠原は『大豪 清水次郎長』の中

で次のように書いている。

(次郎長はある時、予の間に応じて斯う述懐したことがある。

「何? どのくらい人を切つたかって? さうさなあ——」

彼は遠い昔を振り返るやうに、しばし黙然となながら、

「隨分長い間喧嘩商売をやっていたの

だから、随分人を殺したが、其奴等はみんな悪い奴等だった。俺はよい人間や罪のない者はけつして殺さない。いや殺さない許りじや無え、切り合いの中でも、忠僕とか孝行者だと知つたら、わけもなく切れるのを、こっちから刀

を引いて逃げてやつた事も度々ある。尤も、これあ「男」ならあたり前だが、昔から俺は孝行息子や、貞節の婦人に二度の練習船砲砲射撃ばかりさ。清水港の沖合いでね

「どうじや小笠原、なにか近頃痛快な

話もあるかね」

と肩を叩いた。

「なあに、痛快といえば、一ヶ月に一度出つくわすと、無性に嬉しくて仕方がない。だからそんな人は、毛筋ほども苦しめたことは無い。これだ

けは昔をぶり返つてもいい気持がする。全く寝ざめがいいよ」

次郎長の口を借りて、国のためを思

い立ち上がつた皇道派の彼らを一概に非とすべきではないと、勵善懲惡の氣持を述べたのだろうと思われる。

次郎長と相撲した廣瀬武夫

もともと小笠原が次郎長と出会ったのは前述したように、廣瀬武夫の推奨によるものであった。

小笠原は著書の中で、

(横須賀の水交社で予が食事を済ませた後、二三の同僚と紫煙をくゆらせて

いると、そこへ廣瀬がやつってきた。

「どうじや小笠原、なにか近頃痛快な

話もあるかね」

「なあに、痛快といえば、一ヶ月に一度出つくわすと、無性に嬉しくて仕

方がない。清水港?」

廣瀬は身体を乗り出すようにして、

「では、有名な侠客、次郎長に会つた
ろう」

「次郎長？ そんな奴は知らんから、
無論会つたことはないね」

「馬鹿！」いきなり廣瀬は大声で怒鳴
り立てた。実に声の大きな男だつた。

「貴様、次郎長を知らんのか。清水に
度々ゆきながら次郎長に会わんといふ
間抜けがあるか。次郎長はえらい男だ。
小才子ばかりうようよして居る當世に、
ああいう大木のように線の太い男がい
るかと思うと實に愉快じや。人にめつ
たに惚れぬ山岡鉄舟だつて、次郎長に
はゾッコン惚れ込んでいた。嘘だと思
つたら、貴様いって会つてみろ。俺が
紹介してやる」

口を極めての称揚だ。否といえば、
眞剣に腹もたてかねない見幕である。
そこで全く強制的に紹介状をもたされ
てしまつたわけだが、実は廣瀬には悪
いが、その時には別に急いで、紹介状を
役立たせようとも思つていなかつた
と書いている。その後小笠原は次郎

長に会い、非常に感銘を受けたことを
書いている。

廣瀬がまだ大尉だった頃、海軍軍人
約50人で侠客清水次郎長のもとを訪れ
た。次郎長がジロリと見渡し、「皆の
衆、よく御座つたが、こうして見渡し
たところでは男らしい男は一匹も居な
いなあ」と言うと、軍人達はその勢い
に押されてただ苦笑するだけであつ
た。しかし、廣瀬はいきなり諸肌を脱
ぎ、「男か男でないかこれを見ろ」と言
うなり、自らの拳で鳴尾を50発ほど殴
り続け、「どうだつ、この様に殴つても
俺の肝つ玉は潰れぬわい」と怒鳴つた。
これにはさすがの次郎長も驚き、「な
るほど、お前さんは男だ」と言つた。

その後、うち解けて談笑しているとき
に廣瀬が「お前さんはずいぶん生死の
境を越えて來た人と聞くが、人と喧嘩
して勝つ方法は何だ？」と尋ねると、
次郎長はこう答えた。「一も肝つ玉、
二も肝つ玉ぢや」

次郎長は相撲が好きであった。子分
にも相撲取り上りが多かったです。廣瀬
とは相撲に関しても逸話がある。

「廣瀬さんは柔道が得意で、講道館で
も勝ち続けたと聞いた。わしは、「で
は一度相撲をとろう」と言つたところ、
年寄りに負けるはずはない、といふよ
うな態度で庭に立つた。両方ともふん
どしだけだ。柔道は組まなくてはなら
ぬ。わしは、廣瀬さんが手を伸ばすと
払い、手を伸ばすと払つていたが、頃
を見計らつて、ふんどしのあたりを頭
突きで押して、押し出した。わしは、
「柔道は柔道、相撲は相撲、剣道は剣
道、喧嘩は喧嘩だ。これを知らないと、
相手の手の内に入つてしまつ」と言つ
たら、非常に感心していた」

次郎長に圧倒された秋山真之

八代六郎は日露戦争の際に「浅間」
の艦長として活躍していた。彼が大尉
であつたころに、小笠原といつしょに
清水港に行つたことがある。次郎長に
会つてみたいというので、小笠原は八

代に同道して次郎長宅に行つたが次郎長は亡くなつた後であった。

現在次郎長の墓のある梅陵寺に鉄舟の書が掲げてある。それは「精神満腹」と書いたものだ。この書のことが契機で、「精神満腹会」ができ、八代頭山満などが名をつらねている。また次郎長は富士山麓の開墾事業をしたが、開墾地は不毛に近く、次郎長も非常に苦労している。

結局、明治17年に開墾打ち切りになり、その土地は民間に払い下げられた。明治39年2月に開墾の記念碑がここに建てられたが、そこには次郎長の功績がたえられ、八代の筆になる碑に、「開墾に従事するように励ました静岡県令の大迫貞清の『^{すう}皇國の為にと拓け駿河なる富士の荒野のあらぬ限りは』」といふ歌が書かれている。

最後は『坂の上の雲』の主人公の一
人、秋山真之のことである。秋山は日
本海海戦の案を練つたということで、

司馬遼太郎はその業績を高く評価して
いて、この物語の主人公にしている。

しかし、彼は參謀長ではなく、一參謀にすぎなかつた。そのため司馬の文章が出るまでは、世間的にはあまり知られてなかつたとも言える。

ではなぜ秋山は次郎長に関係したの
だろうか。

彼も小笠原に連れられて次郎長に会
つた士官の一人である。第二次大戦後、

*

とを次のように述べている。

「秋山は、どうしても次郎長に会いたいと言っていた。しかし、実際に次郎

長に会うと、圧倒されたか、一言も口をきかなかつたのだ。そして軍艦に帰る途中、「すごい男だ、だまつていても

人に余計なことを言わせないような人物はそういうものではない」と、何度も「すごい男だ」とくり返していた

『坂の上の雲』は明治という近代日本の勃興期に生きた若者を描いた作品である。そこには今では忘れられた生き

る上での夢がある。そこが人々がこの物語に惹きつけられる理由であろう。

当時は軍人など社会的に高い地位にある、なんといつても、墨庵の『東海遊俠伝』に書かれた実物であるというここと、さらに親友の正岡子規が墨庵の歌を高く評価していく、彼が養子にまでなった人物はどのような人か知りたかつたからだというのだ。

小笠原は秋山を連れていった時のこ

代に同道して次郎長宅に行つたが次郎長は亡くなつた後であった。

現在次郎長の墓のある梅蔵寺に鉄舟の書が掲げてある。それは「精神満腹」と書いたものだ。この書のことが契機で、「精神満腹会」ができ、八代が初代の会長になつてゐる。顧問には頭山満などが名をつらねてゐる。また次郎長は富士山麓の開墾事業をしたが、開墾地は不毛に近く、次郎長も非常に苦労している。

結局、明治17年に開墾打ち切りになり、その土地は民間に払い下げられた。明治39年2月に開墾の記念碑がここに建てられたが、そこには次郎長の功績がたたえられ、八代の筆になる碑に、開墾に従事するように励ました静岡県令の大迫貞清の「^{さなづか}英國の為にと拓け駿河なる富士の荒野のあらぬ限りは」という歌が書かれている。

最後は「坂の上の雲」の主人公の一

人、秋山真之のことである。秋山は日

本海海戦の案を練つたといふことで、

司馬遼太郎はその業績を高く評価して

いて、この物語の主人公にしている。

しかし、彼は参謀長ではなく、一参謀にすぎなかつた。そのため司馬の文竇が出るまでは、世間的にはあまり知られていなかつたとも言える。

ではなぜ秋山は次郎長に関係したのだろうか。

彼も小笠原に連れられて次郎長に会つた士官の一人である。第二次大戦後、

小笠原に会つた私の父、璋一は当時次

郎長に会つた海軍士官の名前を書いて

もらひ、彼らについての説明を受けた。

その際に秋山のことが出た。秋山が次

郎長に関心をもつたのは、次郎長の豪

放な性格に惹かれたということもある

が、なんといつても、愚庵の『東海遊

俠伝』に書かれた実物であるということ

と、さらに親友の正岡子規が愚庵の歌

を高く評価していく、彼が養子にまでなつた人物はどのような人か知りたか

つたからだというのだ。

小笠原は秋山を連れていった時のこ

とを次のように述べてゐる。

「秋山は、どうしても次郎長に会いたいと言つてゐた。しかし、実際に次郎

長に会うと、圧倒されたか、一言も口をきかなかつたのだ。そして軍艦に帰る途中、「すごい男だ、だまつていても人に余計なことを言わせないような人物はそういうものではない」と、何度も「すごい男だ」とくり返していた」

* * *

『坂の上の雲』は明治という近代日本の勃興期に生きた若者を描いた作品で

ある。そこには今では忘れられた生き

る上での夢がある。そこが人々がこの物語に惹きつけられる理由であろう。

当時は軍人など社会的に高い地位に

あり、日本を動かしているような人だけに夢があり、生き甲斐があつたので

はない。市井に生きる人たちも夢を求

め、得られた時代なのだ。『坂の上の雲』の登場人物と次郎長の人間ドラマ

はこのことをはつきり示してゐる。